

奨学生近況

* 4名が専門学校を卒業しました *

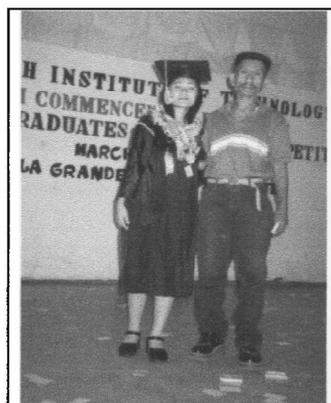
この3月は車両整備、薬局助手、ホテルレストランスタッフなどの専門知識・技能を

修めた4名の奨学生が卒業しました。

ハイスクール4年間と専門学校2年間の支援、さらに小学校5年生から奨学生だった子どもの場合は、通算8年間HANDS奨学金を受けての旅立ちです。

長年応援してきた子どもが卒業したり中途退学をした時に、いくらかでも奨学金返還の義務を課した方がよいという議論がありますが、学んだことを家族や親族、村の仲間に返す機会があると考えて、私たちは子どもたちを励ますとともに、元奨学生の動向把握に努めています(下段の表参照)。

またCMBのスタッフグループは、中退した子どもを含めて「奨学金を村の仲間に返還する」方法を提示してきました。その方法は前号で報告のメリアンのように、卒業後の1年間は教育の機会に恵まれない村で、ボランティア教師として働くことを義務化することです。ゴメロ、グンガ、キアミなど辺境の村で、就学前の子どもや大人の識字教育を手伝うこととなります。無給ですが、1ヶ月に米2分の1袋(約25kg)と交通費がCMBから支給されます。

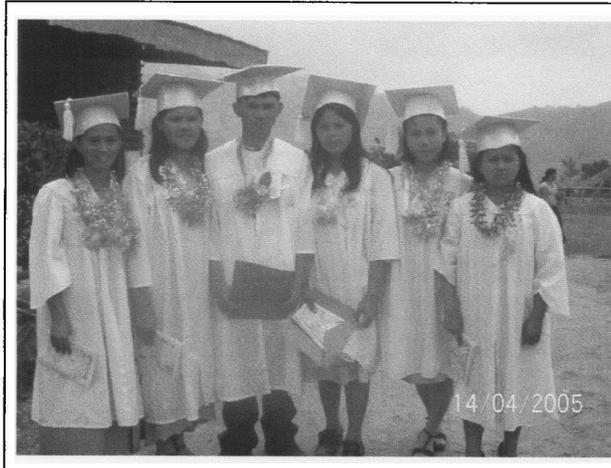


ホテルレストランスタッフ養成コース卒業のアーリーン。今年CMBスタッフとして住民組織化の手伝いをする事になっています。

<村に戻った奨学生の事例>

ドリ (男)	英文科を出てキアミに赴任。講習を受けて小学校教員資格に必要な単位を取得。政府教員試験にも合格して、現在ラムブソン小学校教師。
ビーナ(女)	助産師専門学校卒業後、キアミで教師とヘルスワーカー兼務。現在地方政府に勤務
メリアン(女)	初等教育課程を卒業後、ラムブソンでボランティア先生として1年間勤務。昨年10月政府教員試験合格。今年CMBダタルルタイ分校に移動し、正規教員となる予定。
スヌリア(男)	経営学科を卒業後、CMB事務局勤務を希望したが新規採用枠がなく、従兄弟や奨学生だった同級のジュニアワタとアトゥモロックなどでピラーンの組合作りに取り組む。
マルチノ(男)	車整備専門を終えて有機農業を1年間学んだ。シラル村の自分の畑をモデル農場にしてボランティアとして住民への農業指導に取り組んでいる。

今年ハイスクールを卒業した奨学生は15名、うち11名がMSU進学を目指しています



2004年9月に実施された国立ミンダナオ大学(MSU)の一般入試では全員不合格でしたが、交渉により先住民族特別枠で全員入れることになりました。進学を希望しない4名を除いて現在11名が、MSUの寮で進学の適正をみる試験に向けて補習授業(英語、数学など)を受けています。合格者のみが6月の正式入学許可となります。なお、先住民族枠入学の場合は、前期はハイスクールの復習に当てられ、半年遅れてカレッジの単位取得が始まります。(写真:ミアソン村・公立ハイスクール卒業の6名。うち4名がMSU進学希望です)